
ダンジョンに潜ろうと思います

ボナンザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンジョンに潜ろうと思います

【Nコード】

N0100BA

【作者名】

ボナンザ

【あらすじ】

とある宗教の要職を連ねる一族として生まれた主人公は、その生き方に疑問を持ち、日々己の命を燃やすダンジョン探索者に憧れることになる。恵まれたレールを逸脱する事になるが、主人公に後悔はない。しかし主人公はその生まれから、ダンジョン探索者の認可と同時にとある密命を受けることになるのだった。

01話 グインは未だ探索者未満 Vol.01

気合の入れた一閃が肉を切る。

切り跡からは血が飛び散り、地面の上を首がころころと転がった。

「ふう、やっとクリアか……」

薄暗い洞窟の中に、一人の男の声がこだました。

男の名前はグイン。

将来をダンジョン探索で生きていこうと決心した、15歳の少年である。

グインは黒い煙となって消えていくモンスターに目をやった。

今倒したこのモンスターは、このダンジョンに潜むボス。最下層の君臨者だ。

体長はグインの倍、体重はおおよそ数十倍もあっただろう。

しかしグインは、その鍛え抜いた剣技で、一人のこのボスを打ち倒したのだった。

「さて、クリア報酬をいただきましょうかね」

グインは血で汚れた剣をぱつと振って、鞘に収める。

グインは息一つついておらず、まだまだ余裕が見えていた。

決してこのボスが弱いわけではない。むしろこのダンジョンを一人でクリアしたグインが異常なのである。

ボスを倒したことにより奥の扉が勝手に開く。

グインは足を進めて入っていく。

そして奥あったのは、赤い宝箱だった。

「なんつーか、こついつのって一体誰が用意しているんだろうね」
グインはひとり言を呟いて、しゃがみ込み宝箱を開けてみる。
中にあつたのは一振りの剣。
それを見たグインは顔をしかめる。

「また武器かよ……」

これで3連続武器である。

クリア報酬と言えば、そのダンジョンの中でも最高のものが手に入るとされているので、否応にもその期待は高くなる。

しかしもうすでにある程度の装備が揃っているグインにとっては、このような武器は必要なかった。

もちろん今の武器よりも良い物という可能性もあるが、今グインが使っている冥剣『ガクヒ』はこれ以上の難易度のダンジョンで手に入れた一品のため、その可能性は低いのだ。

それよりも特別な消耗品や便利なアイテムの方がグインにとっては嬉しいのである。

グインはしぶしぶと剣を拾い、背中に背負っていた袋に詰め込むことにした。

すると不思議なことに、その袋は体積を増すことなく剣が収められる。

この袋はレア効果の一つである『亜空間収集機能』を備えているため、どれほど荷物を積んでもかさばることがないのだった。

グインはクリア報酬の奥にある、脱出用の泉に身を浸し、ダンジョンを後にした。

宗教都市ブルバニア。

そこはグインが生まれ、育った、世界に名だたる大都市である。宗教という言葉が冠に付いているように、この都市はヤズマ教という宗教の聖都が置かれており、そのため貿易に信者に神官にと、多くの人間が交易し莫大な富が築かれていた。

グインはその街の一角にある、小さな酒場に入っていく。表の看板には木彫りの文字で『トサカ頭のニワトリ亭』と書かれていた。

「いつらっしやい、ってグインか……」

筋骨隆々としたモヒカン頭の店主が、グインを見るなり呟いた。

「おいおいマスター、そりやないっしょ。これでもきちんとした客だぜ、俺？」

「客ねえ。まあ、笑顔を振りまいて欲しけりや、きちんとツケは払うこつたな」

「うげっ、それを言われちゃ返す言葉がなくなっちまう」

グインは笑いながら、バーのカウンターに腰掛ける。

「あー、疲れた疲れた。ひとまずエールと豚の塩漬け一つずつお願いますわ」

「はいはい、どうせ今回もツケなんだから？」

「わかる？」

いつもの軽いやりとり。

グインはこの空気が好きだった。

「今日もダンジョンの方に行ってきたのか？」

「マスターが酒を注ぎながら聞いてくる。」

「うん。もうあのダンジョンならソロでクリアも楽勝になっちゃったよ。」

「へえ。あそこはC級の中でもそれなりに難易度は高い方なんだがな。それをお前みたいなガキンチョがねえ。実力だけは一人前だ。」

「まあね。自画自賛になっちゃうけど、自分でも実際結構なもんだと思うよ。俺ぐらいの年齢であのダンジョンをソロクリアできるのは、世界でもほんの一握りでしょ？」

「まあな、それは認めてやるさ。しかしそのくせ、金払いが悪い。そこさえどうにかなりや、俺としても愛想を振りまいてやってもらいたいがな。」

「もく、おっちゃんには悪いと思ってるよ。でも俺の年齢じゃあ、ギルドにはまだ登録できないんだからしょうがないじゃん。おかげで戦利品を捌けなくて、溜まりに溜まっちゃって困ってんだよ。」

ギルドと一口に言っても様々であるが、たいていギルドと言えば『ダンジョンギルド』を指すのが常である。

ダンジョンギルドは世界に点在する数多のダンジョンを統括し、運営するギルドであるが、この世界においては一国に匹敵するほどの権力を持っていた。

そしてそのダンジョン内で手に入った武器は、売買をするならギルドを介在してでしか許されず、個人で販売することは固く禁じられている。

そのためゲインは、手に入れたものは膨大なれど、金に変えることはできていなかった。

「あれか。まだ親父さんが許してくれないのか。」

マスターは注いだばかりのぬるったるいエールを、ゲインの前に

置きながら聞いてみる。

グインはそれを、ぐいっと一気にあおったのだった。

「そつ。親父のやつ頭が固くてさあ、身内からダンジョン探索者のような下賤な者を出すわけにはいかん！　つてそればっか。まったくいつの時代だよって話さ。さつさと16になって、独り立ちしてえよ」

16歳未満がギルドに登録するには、保護者、もしくは後見人の許可が必要だ。

おかげでグインは今までずっと、モグリのダンジョン探索者として行動している。

「探索者が下賤ねえ。お前の親父さんって結構な身分なものなのか？」

「うっ……それは、内緒」

「ふん、まあいいがね」

余計な詮索はしないとばかりに、マスターは豚の切り身の乗った皿を出した。

豚の肝の塩漬けであるが、これに胡椒がたっぷりとかかっており、キツイ塩味がこれまた酒に合うのである。

グインはぺろりと一切れを飲み込む。

「うっめ」

香ばしい匂いと、弾ける辛味が合わさって、口の中がひりひりする。

それを癒すように酒をぐびぐびと飲み、息を吐く。

「あゝ、最っ高。これ以上うまいもんなんて、ぜってーこの世に存在しないだろ」

「そう言ってもらえるとお世辞でもありがたいがね」

「いやいやマジだって。最高だよこのコンボは」

そうしてゲインは、もう一切れの豚の塩漬けに手を伸ばしながら呟いた。

「しかし、こうしてこれが食えるのも、あと一ヶ月。そう思うと、16になるのも良いことばかりじゃねえなあ」

遠くを見つめ、寂しそうな瞳をしたゲインを、マスターはグラスを拭きながら見つめる。

「確か来月が誕生日だったっけか？」

「そう。16になるから、晴れて俺も一人前の探索者になれるんだけどね。でもそしたらこの町を出なきゃいけない」

「ん？ そうなのか？ 別にこの町を根城にしてもよかるうに」

「いやいや、駄目だよそんなの。やつぱ旅をし、世界中のダンジョンを制覇してこそその探索者さ。家住なんて、三下のやることさ」

ダンジョンは世界各地に点在する。

その中には様々なダンジョンを探索する流れの者もいれば、一つのダンジョンを縄張りにする定住者もいた。

しかしその実後者の方は、基本的に実力が劣るとして下に見られることが多いのだ。

若いゲインにとって、それは到底認められることではない。

「ふん。そんなもんかねえ」

マスターは呆れるように呟いた。

「まあ実際は、俺はそういうのも有りかなあ、とは思っけどね。安定を求めるのは人間の性だろうし。ただ若いうちは挑戦してみるべきでしょ？」

「ほう、言っじゃないか」

「突っ走ってばっかじゃ、どっかで息切れするのは目に見える。そんぐらいはわかってるさ。だから俺は、体力の有り余ってる今、やりきりたいんだ」

満足そうに呟くグインを見て、マスターはにやりと笑った。

「とか何とか言っつて、実はこの町で暮らすと、親と顔を合わせることになるから嫌なんだろ？」

グインは渋い顔をする。

「うう、まあ、それもあるけど……」

「ふん。親の期待を裏切っていたたまれないんだろうが、どこかで割りきらんにゃ、一生呵責となって追いつがるぞ。それが剣の鈍りにつながつて、命を落す事になるかもしれん。心にはっきりと白黒はつけておくようにな」

グインは舌打ちをした。

「何だよ、説教かよ」

「ああその通り。これは説教だ。そもそもお前みたいな年頃が、説教から逃げきるなんてことないんだよ。まあ悪いことは言わないから、きちんと出発前にけじめはきちんとつけとけよ。そのまま黙ってだと、きつと後悔することになる」

グインはテーブルに頬杖をつき、不貞腐れたように呟く。

「けじめねえ……」

するとマスターは、テーブルの下から、何やらノートを取り出した。

そしてペラペラとめくり、あるページのところに来ると、グインに見やすいように反転させて差し出す。

「これがお前の貯めたツケの総額な。これをきっちり払い終えるのも、けじめの一つ」

ページを見たグインは驚いた声を上げた。

「ええっ、12700オース!? それってマジで!?!」

12700オース。

それは一般家庭の一ヶ月の生活費に相当する金額だった。

「ああマジだ。でもこれでも結構おまけしてやってんだぜ? かわいい弟分のものとしてな」

「うえ〜、かわいい弟分っていうなら、全部タダにしてくれてもいいのに……」

「駄目だ。きつちりと責任は果たす。それは大人として当然の義務だからな。甘やかすわけにいかん」

グインはテーブルに突っ伏した。

「また説教かよお……わかったよ、払いますっ」

グインは力なくそう答えた。
マスターは満足そうに頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0100ba/>

ダンジョンに潜ろうと思います

2011年12月31日04時46分発行